

# 地域に根ざした日本語教室をめざして

齋藤 裕子

(日本語ボランティア)

## も く じ

1. 日本語教室の概要
2. 教室の原点
3. 学習者の望んでいること
  - (1) 「生活に役立つ日本語」
  - (2) 「わかりやすく教えてほしい」
  - (3) 「文化や生活習慣が知りたい」
4. 生活を支援する教材
5. 子どものためにも日本語は必要
6. 気軽に学べる日本語教室
7. 地域でボランティアにできること

## 1. 日本語教室の概要

神戸市垂水区の明石市に接する地域には大規模な県営住宅があり、現在700人以上の中国帰国者とその家族（以下「帰国者」という）が住んでいる。この地域では、16年前から日本語教室が開かれていて、私は日本語ボランティアとして活動に参加してきた。全く何もわからないところから始めたのだが、この教室でこの人たちに出会ったことによって、「生活者にとっての日本語」について考え、教材などを作るようになった。今も試行錯誤の連続だが、とりあえず現在に至るまでのことを述べ、皆様方のご意見やご指導をいただきたいと考えている。

### 開講の経緯

この地域に帰国者の入居が始まったのは20年前で、最初は5家族だった。その中の一人の子どもが児童館に遊びに来て、言葉が通じなかったということがあった。

たまたま当時の児童館館長と地域の自治会委員長が、ともに満州からの引揚げ体験者だったので、その子の存在を知って、「我々もひょっとしたら帰国者になっていたかもしれない。日本語がわからなくて困っている子が地域にいたら、何とかしてやろうじゃないか」ということで、子どものための日本語会話クラブができた。1983年には大人の学習者も受け入れ、「日本語教室」としてスタートした。

当初は、毎週土曜日の午後2時から4時まで、児童館の一室を使って開講していた。学習者は十数名で、帰国者本人や二世が中心だった。ボランティアの講師は、中国語の話せる元中学校長で、私はこの講師と知り合いだったことから手伝うようになったのである。

それから16年、当時の関係者はほとんどが引退されたり亡くなったりし、学習者やボランティアの人数は増えて、かなり様変わりした。

### 現在のすがた

現在、教室は「神陵台ふれあいのまちづくり協議会」(地域の自治会の連絡協議会)が主催し、同協議会の委員長を代表としている。開講日は毎週土曜日、会場には同協議会が運営している地域福祉センターの1階ホールを当てている。講師は9人(男性4人、女性5人)のボランティアである。

クラスは入門、初級、中級、上級および小学生、中学生の6つの日本語クラスで、講師1人に学習者3～10人ぐらいの小グループ学習。他に中学生の補習クラスがあって、こちらはマンツーマンである。学習者数は日によってばらつきがあるが、全クラス合わせて、1回に30名前後である。

教材は、入門、初級、中級、中学生の日本語の各クラスはそれぞれ自主教材、上級クラスは市販教材や新聞雑誌等から選ぶことが多い。小学生クラスは市販の子ども用教材をアレンジして使い、中学生補習クラスは学習者がそれぞれ自分のわからない問題を持ってきている。

学習者の募集は特にしていないが、教室の存在は地域の帰国者の間でよく知られており、前に学習した人の紹介や口コミによって、年間30～40人の新規学習希望者が訪れる。小学一年生から六十代までの帰国者たちで、近年は帰国者本人よ

り、二世や三世および中国から迎えた彼らの配偶者が多くなっている。日本語学習経験がなく、入門クラスで「あいうえお」から始める人が多い。

いつからでも勉強が始められるように、いわゆる入学卒業の時期を定めず、随時受け入れている。原則的に本人が希望するクラスを受講する。入門が15～17時、初級が11～13時、中級が13～15時のように、クラスによって時間をずらしてあるので、レベルの異なる2クラスを受講することもできる。ほぼ半年から1、2年で自主的に卒業していくが、さらに勉強したい人のためには上級クラス（15～17時）がある。

## 2. 教室の原点

### 週2時間の限界

開講当初から現在に至るまで、運営形態も教室活動の形態もずいぶん変化した。特に教室活動のやり方や考え方が変わり、自主教材を作成するようになったのは、学習者とボランティアの相互作用によるところが大きい。

1983年頃は、テキストとして『中国からの引揚者のためのやさしい日本語』（厚生省援護局編）や『日本語の基礎』（海外技術者研修協会）を使っていた。『やさしい日本語』は簡単な内容で、中国語の訳や説明がついているし、『日本語の基礎』は文法がしっかりしている。しかし、実際使っていると、どうもうまくいかない。教師用マニュアルを読んで準備していても、教科書の文を読んで練習問題や会話練習をして終わり、という感じだった。日本語教育の知識がないからだと思って、それなりに勉強もした。それでも、教室で教える日本語が学習者の役に立っているという実感がつかめなかった。

そうこうするうちに、しだいに出席者が減ってきた。私たちの日本語教室は無料で自由参加だから、人々は役に立つと思えば出席するし、役に立たなければ出席しない。興味のもてない教材やへたな説明、要領よく質問に答えられないことが続くと、確実に出席者が減る。

就学生に教えている本職の日本語教師の知人に相談すると、「うちの学校では毎日4時間ずつ勉強しているのよ。1週間に2時間程度でいったい何が教えられる

の？」と言われてしまった。確かに、できることはわずかだし、次の授業までかなりの部分を忘れてしまうので、実際何ほどのこともできない。しかし、それでも日本語を勉強したいと教室に来る人の気持ちを思うと、やめてしまうわけにもいかず、素人であることの限界を感じて悩んだ。

### 「学習者は生活者である」ことの発見

そんなある日、学習者の一人がおずおずと「子どもの靴を買いたい、どう言えばいいか教えてほしい」と言い出した。他の人も興味をもち、みんなで考えることにした。どの店へ行くか、サイズをどう言うか、気に入らない場合はどうするか、買う場合はどうするか、値切る場合はどう言うか、次々に質問が出た。言い方を板書して、練習した。

次の週、その人は、うまく靴が買えた一部始終をみんなの前で話してくれた。家で何度も練習して言い方を書いた紙をしっかりと握って行ったという話、希望のサイズが買えたと言う時の誇らしげな様子、それを聞いている人たちの共感の笑顔が印象的であった。私の方も「靴を買いに行く」という絵入りの教材を作ったので、経験談とあいまって単語や文法にも興味をもってもらえた。質問もたくさん出た。さらに、「来週歯医者に行くのだが」とか「保育所の先生に何と言えばいいか」などのリクエストも出た。それは今までとまったく違う学習者の姿だった。

この時気づいたのは、この人たちは大人で生活者で、自分の要求をしっかりと持っているということである。何から何まで手取り足取り教えてもらわなければならないようなひ弱な人たちではない。また、従来の教え方や使っていた教科書が彼らに合っていないこともわかった。

しかし、「生活に役立つ日本語を教えてほしい」「会話が聞き取れるようになりたい」「職場でわからない言葉がたくさんある」と言われても、彼らの生活は家族構成から仕事など一人ずつ違う。そのうえ、仕事が忙しく、家庭学習の時間も十分とれないと言う。教室での勉強は、1週間に1回1クラス2時間という時間の制約がある。いったいどんな方法があるというのだろうか。

試行錯誤のあげく、今目の前にいる学習者一人一人が自分で学び、自分で生活

できるように手伝えばいいのだと考えた。まず、「自分で学べるように」という観点から学習事項の見直しをすること、そして、質問や要望をどんどん出してもらい、それにしっかり応えることを大切にしよう。このようなやり方は今まで参考にしてきた日本語教師用マニュアルの教え方とは違うが、我々はボランティアだから、こういう一人一人のライフスタイルを大切にし個々の思いに応えるやり方を追求してゆけばいいのではないだろうか。こう考えた時から迷いがふっ切れ、大胆に教材や授業方法を変えていった。すると、回を重ねるごとに出席者が増えてきたのである。

また、私たちが質問や要望に応える努力をしていることが理解してもらえるようになると、さらにいろいろな希望が出されるようになった。それはまとめると、「生活に役立つ日本語を教えてほしい」「わかりやすく教えてほしい」「文化や習慣が知りたい」ということであった。

### 3. 学習者の望んでいること

#### (1) 「生活に役立つ日本語」

「生活に役立つ日本語」は仕事や家庭事情によって一人一人異なる。それを教室で教えるのは不可能なので、教室以外の所で自分で学べるように、聞き取りの力と質問する力をつけることが大切だと考えた。

#### 聞き取り力

聞き取る力をつけるにはどうすればよいかと模索している時、学習者から、中国には「聴写」という音を聞いて書き取る学習方法があるという話が出た。中国では小学校でも行われているというので、そのなじみのある方法を取り入れることにした。講師の発音を聞いてノートに書き取るのだが、最初は一文字二文字から、だんだん長い単語が書き取れるように、しだいに文が書き取れるように毎回練習する。授業の最初にその日の学習に必要な単語や文を「聴写」し、発音練習にも使うようにすると、文型学習の導入にもなり、時間を有効に使うことができる。続けてみると、たいへん効果があることがわかった。

「聴写」は、聞く力がつき、発音に注意するようになるだけではなく、単語を増やすのにも有効である。ある人は、いつも職場で耳にする「メシにしよか」の意味を教室で質問した。また、ある人は、駅のアナウンス「三宮を出ますと大阪まで止まりません」を質問した。

日常生活の中で日本語を聞いても、書き取れなければそのまま消えてしまうが、書き取れば、自分で意味を調べることも人に尋ねることもできる。つまり、与えられた単語を覚えるのではなく、職場や生活の中であるいはテレビを見ながら、それぞれ自分が興味を持った単語をとらえることができるのだ。自分で獲得した単語は忘れないし、そういう経験こそが生活する上での大きな力になると思う。

### 質問する力

もう一つ重視しているのは、知りたい情報を得るための質問の仕方である。百の単語を教えるより、「これは何と言いますか」や「〇〇って何ですか」を使うようにすることが本当の力になる。授業中も一方的に教えるのではなくて、発言しやすい雰囲気をつくって、どんどん質問してもらおう。特に、入門初級の頃は、質問が出るような状況をわざと作るようにしている。また、教室以外でも学習した言葉を使ってみるように勧めている。

質問できるようになると、良いことが三つある。一つは、自分で学ぶ力になるという点である。教室での学習時間は短いですが、地域や職場などで周囲の日本人に質問することによって、日本語力も生活力も伸ばすことができる。そしてそれが自信につながっていく。だから、一週間後に教室で会った時、前回よりずっと進歩している。

1995年の阪神大震災時に県営住宅の建物に被害が出て、彼らも1ヶ月ぐらい小学校で避難生活をした。その時、日本に来てまだ2ヶ月ぐらいの人が「ポリタン、給水車、テント」という言葉を使っていたのに驚いた。「そんな言葉をどうやって覚えたんですか」と尋ねると、日本人がポリタンクを持っているのを見て、「すみません、これは何ですか」「これはポリタンや」、「給水車来たよ」と言うのを聞いて「すみません、給水車って何ですか」「ほら、あの水の車や」という調子で教えてもらって覚えたのだと言う。これらは、教室であらかじめ想定し

て教えられるような単語ではない。「魚を百匹あげるよりも、取り方を教えたほうが役に立つ」という言葉があるが、教室で学んだことを活用してもらえて、本当に良かったと思った。

二つ目は、質問によってより理解が深まるという点である。彼らは文型を単に文型としてみるのではなく、自分の経験と結びつけて理解しようとする。中には予想できないような誤解もある。

一例をあげると、「～してもいいですか。はい、いいです」という許可の文型を勉強していた時、「いいです」はいつも肯定を示すとは限らないのではないかと、という質問が出たことがあった。「え、どういうことですか」と言うと、職場で「缶コーヒーどう？」と言われた。中国語の“好(良い)”のつもりで、「いいです」と言ったらもらえなかった。これは一体どういうことだろうか、というわけである。すると、他の人からも「そういえば、私も『いいです』と言ったのに、そのようにしてもらえなかった」という体験が次々と出された。このように、質問し納得する過程を経て、状況に合った日本語が使えるようになっていくと思う。

我々の方は、準備していった教材が予想外の方向に発展するし、どうしてもその場では解決できない質問も出るのととても緊張する。しかし、教えられることもまた多い。

三つ目は、教室以外の場で日本人との交流のきっかけになるという点である。例えば、帰国者が近所の日本人に対する時、挨拶以外にどう言えばいいかわからず、近所の人でも日本語が通じにくい彼らに何を話しかければいいかわからないことがよくある。そういう時、彼らの側から「これは何と言いますか。これはどうすればいいですか」と尋ねることで、自然な交流が始まる。回覧板やゴミのことを尋ねて以来、近所の人々の目が温かくなったという話もよく聞く。地域や職場で暮らしていく上で、大切なことだと思う。

### 短文づくり

生活に役立つ表現ができるようにするために、短文づくりも重視している。

ちなみに、「作文」は個人作業で時間がかかりすぎるし、その日の学習事項からポイントがずれるおそれがあるので、教室活動には適さない。また、我々の教

室の学習者が今必要としているのは、日本語で作文することではなく、あくまでも、「短文」を使いこなせることなのである。

短文づくりは、その時に学習した重要な文型や単語を指定して、「この文型(単語)を使って、5句作ってください」のように言う。さらに、軽い調子で、「これは文型の練習だから、ウソでも何でもいいです」と言う。中国できびしい体験をしてきた人や日本で不本意な生活をしている人などは、自分の生活や生の思いを表現することにためらいがある。だから、緊張をほぐす必要があるのだ。

みんなが書き始めると、口の字形に並べた机のまわりを回って、書いている途中のものを一人ずつ見る。わからない単語を質問されたら、その単語は他の人にも見えるように黒板に書く。「昨日のことだったら、文末はどうなりますか」「否定形にしているのはおもしろいですね」「中国ではどうなんですか？」など、他の人のヒントになるようなことは皆に聞こえるように言う。15分ぐらいで書き上げて、自分の作った文をそれぞれ黒板に書いてもらう。

「ウソでもいい」と言っているが、実際に出てくるのはやはり実生活に基づいた文が多い。日本での生活に対する思いや暮らしぶりが表れている。それは他の人の共感を呼ぶし、生活に密着した単語を増やすのにも役に立つ。だから、せっかくの短文づくりを個人作業で終わらせないで、みんなで読み、発音練習や会話練習、文法の確認にも使って共有するようにしている。

また、何人かが文法的に間違った文を作って、教えかたが不適切であったことが明らかになることもある。短文づくりは、我々の反省材料にもなるのである。

## (2) 「わかりやすく教えてほしい」

中国語ができる講師は少ない

我々の教室の学習者はごく庶民的で、過去に外国語を勉強した経験のある人は少ない。初めて学ぶ外国語が日本語で、しかも、ほとんど予備知識なしに教室に来る。一方、我々ボランティアの中で中国語のできる人は少ない。どうしても、中国語をあまり使わないで日本語を教えることになる。

しかし、媒介語なしに教える場合は、学習者の過去の外国語学習経験や理解力や勘の良さに頼っている面がある。外国語学習経験がない場合は、学習者の精神

的負担が大きい。このような学習者自身の「気づき」だけが頼りという状況では、学習者が気づいてくれなかったら、どうしようもない。教える側は、なぜこんな簡単なことがわからないんだろうと思ってしまい、学習者は、教える側の論理で一方的に言われても理解できない。わからないことが続けば、イライラしてやる気をなくしてしまう。何らかの方策が必要である。

大人が新しい言語を学ぶ際には、母語を手がかりに理解しようとする。母語に学習する言語と同様の概念があれば気づきやすく、概念が違う事柄については気づきにくい。

私自身が英語を勉強したときのことを思い出してみると、動詞の過去形は理解しやすく、冠詞はとても難しく感じた。それは、過去形は日本語にもあるからだし、冠詞は日本語に同様の概念がなかったからだと思う。冠詞は、日本人の先生に日本語で説明してもらったのにも関わらず、よく分からなかった。もし、日本語がわからないイギリス人の先生に英語で教えてもらったなら、全く何も理解できなかっただろう。

帰国者の場合にも同じことが言える。もちろん、中国語のできる講師なら誰でも簡単に日本語を教えられるというわけではないが、どちらかといえば、講師は少しでも中国語を知っている方がいい。そうでない場合は、中国語のできる人や先輩講師、書籍などから積極的に学んで、中国語とはどんなタイプの言葉なのか、日本語とどう違うのか、日本語のどういう点が学習者は理解しにくいのかを知ったうえで、教え方を工夫することが必要だ。そうすることで、学習者の負担をかなり軽くすることができると思う。

### 学習者が“気づく”

成人の学習者には中国語という財産があるのだから、それを活用しない手はない。それで、日本語と中国語に似た概念がある場合はなるべく説明せず、できるだけ学習者が自分で気づいて、日本語の法則を発見できるようにと、考えている。このようにすると、興味関心が長続きするし忘れにくい。講師の方も楽だ。

例えば、入門期の数字の勉強では、1から10まで教えたら、99まで何も説明しない。最初、1から10まで発音を教える。4、7、9には読み方が二つあるので、そ

れも練習する。いつも1から練習していると、順番通りなら言えるけれど一つ一つの数字は覚えていないという人がいるから、逆順にしたり、バラバラにカードを見せて読んでもらう等の練習もする。0を教えると電話番号が言えるから、自宅の電話番号を言うなど、目先を変えながら練習する。頃合いを見計らって1から順番に読んでもらう。10までは十分練習しているから、学習者も自信たっぷり余裕たっぷりである。それで、10の次に黙って11を指す。学習者は「エー、それは教えてもらってないよ」という顔をするが、10と1を指して黙っている。そうすると、「じゅういち」と学習者の方から出る。出たら、駆け寄って握手する。

英語では、11がeleven、12がtwelve、20がtwenty というようになっていて、1から10までと関連性がない。11がten-one、12がten-two、20がtwo-tenのようになっているとわかりやすいのだが、残念ながら英語と日本語とでは数字の考え方が異なっている。しかし、幸い中国語の場合は、日本が中国から学んだので、1が<sup>イー</sup>一、10が<sup>シー</sup>十、11が<sup>シーイー</sup>十一、12が<sup>シーアル</sup>十二、20が<sup>アルシー</sup>二十のように考え方が同じである。学習者が自分で気づくので、こちらから教える必要はない。

「じゅういち」が出ると、あとは簡単で、どんどん言える。20でまたちょっと詰まるが、2と10を組み合わせると「に+じゅう」だと気づくのは、前より早い。この調子で99まで行く。「一を聞いて十を知る」の言葉通り、1から10まで教えてもらっただけで、残りの99まで自分で言えたのだから、学習者から笑顔がこぼれる。日本語はそんなに難しくないと自信がつき、講師との間に親近感も生まれる。些細なことかもしれないが、入門時に与えるこの印象がとても大切だと思う。

さらに、百以上の数も続けて勉強する場合は、「百、千、万」の読み方を教える。ただし、「三百、六百、八百、三千」は、百が「びゃく」や「ぴゃく」、千が「ぜん」になって、読み方が変わる。それで、数字の表の該当箇所を空欄にしておく。そこは空けたまま、その他の数を百万まで練習する。すると、学習者の方から「とばしてある箇所はどうなっているの?」というリアクションがある。黒板の前へ来て「ここ、ここ」と指さす人や、「さんひゃく?ろくひゃく?」と言う人などだ。こうして、質問が出た時点でおもむろに教える。疑問のない状態でこちらから先に説明してしまうと、すぐに忘れてしまう。我々の教室は1週間に2時間と学習時間が短いので、できるだけ印象に残るように効率よくやらなければならない。「知りたい。どうなっているの?」と思わせる状況を作り出して

から教えた方が、真剣に聞いてもらえるし、満足感を持ってもらえるようだ。

### 中国語に配慮した教え方

数字のように、中国語と日本語の考え方が同じ場合は楽だが、中国語にその概念がない場合は、学習者はたいへんとまどろ。例えば、動詞の活用である。

多くの日本語教科書の場合、一般動詞が出てすぐに活用のルールを教える構成になっている。しかも、最初は「ます形」、しばらくたって「て形」、間を置いて「ない形」というようにとびとびに出てくる。これは、その教科書が英語圏の人を対象に作られていて、英語にも日本語にも「時制によって動詞が変化する」という概念があるから、こういう教え方ができるのだと思う。

しかし、中国語には活用がない。ある人は、「なぜ動詞がこんなふうになるのですか。これはヘンです」と言った。またある人は、「『行く 行かない』の『か』はどういう意味ですか」と質問した。「去年の九月に日本に来ます」など、動詞を過去形にしないというミスもよくある。彼らにとって、動詞が活用するのは初めての概念なのである。過去に英語やロシア語を学んだ経験のある人は類推できるだろうが、我々の教室では外国語学習は日本語が初めてという人が多い。活用するということにとまどいつつ、やっと「ます形」を覚えてホッとしたところへ、次々と新しい形を小出しにすると、動詞の全体像がつかめなくて混乱し、ついには理解することをあきらめてしまうことにもなる。

そこで、日本語には活用があることを理解させるステップを置き、動詞の全体像がわかるように活用形を一度に提示するなどの工夫をしている。動詞の活用を短時日に乗り越えることで、後の学習がスムーズになる。

また、音韻の点でつまづく例もある。例えば、「おんがく」「かんじ」「えんぴつ」の「ん」は同じように「ん」と書くが、発音が異なる。「おんがく」と発音した時、舌はどこにもついていない。「かんじ」の時は舌が上顎につく。「えんぴつ」の時は唇を閉じる。この3音は中国語ではきちんと区別されるから、学習者は「同じ文字なのに発音が違う。どの音が正しいのだろう」と考えてしまう。我々が文字に惑わされて音の違いに気づかず、質問されても彼らの疑問がどこにあるかわからないと、彼らは不安で次に学ぶことが頭に入らないし、講師への信

頼も揺らぐ。このことに気づいて以来、「ん」の発音にとまどっている人がいれば、「『ん』は、後ろの音によって発音が異なります」と説明している。

また、促音や長音の発音で、「スーパー」が「スパ」、「がっこう」が「がこ」のように中国人特有の寸詰まりのイントネーションになることがある。「伸ばす音も小さい『っ』も、一拍分の長さですよ」と言ってもなかなか直らない。それは中国語の発音の影響を受けているからだと思われる。

中国語は第一音目（特に子音部分）が強く発音される。一方、日本語（特に関西弁）は第二、第三音目の母音が強い。発音の少し似ている「理由」という単語で比べてみると、中国語では“liyóu”の“l”の部分が強く、日本語は「りゆう」の「ゆう」が強い。中国語は前寄り、日本語は後ろ寄り、とアクセントの位置が違う。学習者が、第一音目の子音を強く発するという中国語のやり方そのままに日本語を発音すると、「りゆう」は「りゆ」になる。また、「スーパー」と言う時、「ス」で息の大部分を使ってしまうので、次の音らしい音である「パ」を出すのを急ぎ、その結果、音としてあまり意識されていない長音の部分は短くなって、「スパ」になる。「一拍伸ばす」と頭で理解していても、実際は息が続かずに「りゆ」や「スパ」、「がこ」のように寸詰まりになってしまうのだ。

もし、一拍分伸ばす練習をしても寸詰まりのイントネーションが直らない場合は、日本語と中国語の発音の違いを比較説明し、第一音目を抑えめに出すようにアドバイスすることで、かなり改善される。

中国語を母語とする人にとって日本語の難しいところは他にもいろいろあるが、我々は日本語に慣れすぎているためにかえってうまく説明できず、「日本語はこうなんだから、理屈抜きで覚えなさい」と言わんばかりの対応をしてしまうことがある。しかし、できるだけ中国語に配慮した教え方を工夫し、学習者の「わかりやすく教えてほしい」という声に応えたいと思っている。

### (3) 「文化や生活習慣が知りたい」

#### 習慣と言葉は不可分

「文化や生活習慣が知りたい」という要望もあるが、我々の教室の学習者が求めているのは、歌舞伎や生け花や着物についての知識ではない。生活に密着した

知識であり、日本人とつきあっていく上でトラブルを起こさないように、お互いに誤解したりされたりしないためにはどうしたらいいか、ということである。

「お互い相手の文化を尊重しあえましょう」という人もあるが、最初から「文化が違う」とわかっている場合は、問題は起こりにくい。むしろ習慣の違いがあることを知らないで、相手の行動を礼儀知らず、常識がないと感じてしまうことが多い。

例えば、我々の教室では初めに「あいさつ」を勉強するが、その時にきちんと説明しておかないと、次の朝、彼らは隣の60歳ぐらいの奥さんに向かって「おばあさん、お早うございます」と挨拶してしまう。「おばあさん」と言われた方は、たいてい不愉快になるが、彼らに悪気はない。中国では「おじいさん、おばあさん」と呼びかけるのは、自分より年長である相手に敬意を払った言い方で、彼らにしてみれば、隣の人とこれから仲良くつきあっていきたいと考えて、失礼のないように「おばあさん」と呼びかけているのだ。気を使っているのに、日本の習慣を知らないために誤解されてしまう結果になる。

また逆に、彼らも自分たちの常識に合わない日本の習慣について、文化の違いだと知らずに腹を立てていることがある。「隣の人に餃子をお裾分けしたら、翌日またお礼を言われた。これはもっと欲しいという催促なのだろうか」という質問を受けたことがある。日本では次に会った時にもう一度お礼を言う習慣があるが、中国ではその時に言えば終わり、何度もお礼を言う習慣はない。それで、催促かと思ったのである。

言葉と習慣は切り離せない。言葉を教えたとき、同時にそれにまつわる習慣や日本人の感じ方も教えないと、その言葉は役に立たない。よく、「日本語ができるようになると、かえってトラブルが増える」と言われるのも、そのあたりに原因があると思う。だから、中級や上級クラスの場合は、簡単な日本語で説明したり教材として取り上げている。入門や初級のクラスの場合は、中国語のできる講師が説明したり、中国語に訳した文章やテープを準備する等の工夫をしている。また、ヘンだと思ったことは積極的に質問してもらおうようにしている。

『中国人と日本人の交流百話』

「日本の習慣や日本人の感じ方を紹介することは、日本式を押しつけることになるのではないか」と言う人もあるが、そういう心配はあまりしていない。日本の習慣や考え方といっても一様ではないから幾通りかの考え方を示すし、日本式でないダメだという言い方はせず、彼らの考えも聞きながら、文化の違いとして紹介するようにしているからである。

文化の違う国で暮らすということは、常に緊張を強いられる。自分のやり方が受け入れられるか心配だし、相手の対応に腹を立てたり困惑したりして、エネルギーを消費する。しかし、前もって知識があれば、実際にそういう場面にぶつかったときに少しは気持ちの余裕が持てるのではないかと考え、1997年に『日本人と中国人の交流百話 - お互いどんなことにズレを感じたか 第一集』（中国語版A5判122頁・日本語版A5判134頁）を製作した。帰国者がどんなことに困ったり悩んだりしたか、また帰国者とかかわった日本人がどういう思いを持ったかについて、62人から136編の体験談を寄せてもらったものである。

これを読んだ多くの帰国者から、「自分が感じていた不安や悩みが帰国者に共通するものであることを知った」「長い間疑問に感じていた日本人の行動が、やっと理解できた」などの感想が寄せられた。また、学校の先生、地域行政に携わる人や地域の役員、民生児童委員の方々にも読んでもらったが、「帰国者の感じ方がよくわかった」「今までそうするのが当たり前と思っていたことが、違う考え方もあるのがわかった」「日本の常識を問い直すヒントが得られた」と好評であった。

さらに、反対意見や別の体験も多数寄せられた。それらは「日本人対中国人」という単純な図式ではなく、日本人が日本人に、中国人が中国人に反対するケースや、中国人が日本人に同意したり、その逆も多く見られた。また、「文化の異なる人とのつきあいが長くなるにつれて自分の考え方が変化してきた」という意見も双方にあった。これら75人130編の意見や体験をまとめて、1998年に『日本人と中国人の交流百話 第二集』（中国語版A5判114頁・日本語版A5判140頁）を出した。

相手のことを知らないから、不安や反発を感じ、不信感や誤解も生まれる。相手の考えを聞き、自分の考えも話すことによって考えが深まり、何かが変わる。文化習慣の違いを考慮にいれて、そのうえで自分はどういうふうに行動するか、

両方の文化を比べてより良い方を選択したり、或いは相手の考え方を考慮しつつ折りあえる点を見つける工夫ができるのである。中国式か、日本式か、折衷案か、自分の考えを説明するかいろいろなやり方があるが、それぞれが場合場合で考えて、臨機応変に対応できるようになるのがよいと思う。

#### 4. 生活を支援する教材

『中国人と日本人の交流百話』は、日本人にも読んでもらうことを意識して作った冊子だが、それまでにも、帰国者向けの教材や生活用語集を作っている。初級用教材『聞き取り練習帳』、中級用副教材『日本語の決まり文句』(中日対訳)、『学校関係用語集』(中日対訳)、『医療関係用語集』(中日対訳)などである。これらの自主教材や用語集を作るようになったのは、やはり学習者の強い要望と協力があったからである。

##### 『聞き取り練習帳』

学習者が「生活にあった日本語をわかりやすく教えてほしい。日常会話が聞き取れるようになりたい」と思っていることと、当初使っていた教科書が彼らにあまり支持されなかったことはすでに述べた。

帰国者は、家族とともに日本に定住するための日本語や生活習慣について知っていたのに対し、日本語教科書の多くは留学生や企業研修生向けで、大学や企業での会話を中心に日常生活があまり描かれていないからである。そこで、授業のやり方に工夫する一方で、彼らの要望に合う教材を探したが、なかなかぴったりのものがなかった。

ちょうどそのころ、中国帰国者用の日本語教材は、文型だけでなく生活場面での会話も重視するべきだとする論文を目にした(田中望 藤田正春論文・『日本語学』1983年3月号)。それに学び、学習者のリクエストで作っていた「靴を買いに行く」「保育所で」などの実用会話のプリント教材を土台にして、『聞き取り練習帳』を作った。

同じころ、『中国帰国者のための生活日本語』(文化庁・1983年)が出された。

これも日常生活重視という観点で作られており、中国語の説明が本にもテープにも入っていて便利である。しかし、この本は、「聞き取り練習」になりにくいことと我々の教室が関西にあるので使いにくい面があった。

我々が作った『聞き取り練習帳』は、生活場面に題材をとり、文法事項にも配慮した成人初級者向けの聞き取り練習用教材である。1課50コマの絵とテープからできていて、42課までである。教室で単語や文法事項を学習し、家で絵を見ながらテープを「聴写」し、次回の授業で場面の内容を詳しく学習するという使い方をする。絵には文字が入っていないので、文字の影響を受けずに聞く練習ができる。何度か改訂して、現在は1課30コマになっている。

この教材は、後半で抽象的な語句が増えると絵だけでは内容がわかりにくい箇所がある。従来は中国語のできる講師が担当していたので、その点はあまり問題にならなかった。しかし、中国語ができない講師にも使えるようにする必要性が出てきたことや、「教室に通えないので、この教材で自習したい」という学習者の要望もあることから、いずれ全面改訂する予定である。

## 文法教材

文法事項を学習するためには別にプリントを用意している。応用力をつけるために文法は欠かせないが、一般の日本語教材は使いにくい。それは、英語の発想に従って作られているからではないかと思う。英語、日本語、中国語はそれぞれ体系の異なる言語だから、英語圏の人にわかりやすい教科書が中国語圏の人にもわかりやすい、というわけではない。文型の提出順序や、どの文型とどの文型をセットにするか、日本語との違いでどこに注意を喚起するかなど、中国語の発想に配慮し、中国語と日本語の違いに着目した組み立てになっていることが望ましい。

中国で出版された日本語教科書を使うのも一つの方法だが、単語や文章が現代日本の生活実態にあっていないものや、日本やアメリカで出版された教科書を訳しただけのものもある。また、中国の出版事情がよくないことから、必要な時に必要な数を入手することができないのも困る。

ただし、中国人研究者の手による文法解説や日中の文型を比較説明してある部

分は、たいへん参考になる。例えば、『標準日本語』（光村図書出版、人民教育出版社共同編集）や雑誌『日語学習と研究』（中国、对外経済貿易大学発行）、その他中国の大学が刊行している日本語文法書などは、そのまま教材として使うことはできないが、解説部分は文法説明に利用している。

また、英語の発想で作られた教科書でも、中国語と英語の発想が同じ部分は利用できる。だから文法については、自主教材に加えて、日本や中国で出版された日本語教科書などの利用できる部分を選択して使っている。

### 『日本語の決まり文句』

「文法は一応わかったけれども、実際の場面ではどの文型を使ったらいいかわからない」という声も出た。それに応えて、現実的な場面を想定して、日本語でどう言うか授業の中で考えることにした。例えば、辞書を貸して欲しい時、どう言うか。普通の言い方では「この辞書を貸してください」だが、丁寧に頼むときは「貸していただけませんか」となるし、親しい時は「貸して」になる。「貸してくれへん？」をよく聞くという人や、「ちょっと、これいいですか？」で通じると言う人もいる。借りる言い方について出しあった後は、応じる側の貸す場合と断る場合の言い方を話題にした。

このようにして授業で出しあった表現を、依頼、申し出、伝聞、禁止など内容別に31章に分類し、同じ意味のことを敬語・丁寧語・だである体・方言（関西弁）で表わして並べた。こうして作ったのが、中級用の副教材『日本語の決まり文句』（A5判239頁）である。

なお、この本には関西弁も入れてあるが、これは「関西弁がわからないと困る。標準語だけでは暮らせない」という声に応えたものである。教科書で標準語を学んだ人は、実生活で方言を聞いて「日本語が通じない」とたいへん悩む。職場の日本人にはその人の話はわかるが、その人自身は言われたことがわからないのだ。

逆に、職場などの会話を通じて日本語を習得し、方言しか話せない人がいる。誰に対しても「あんな、うちのおかん知っとう？ オレなあ、いっつもおかんにおこられとんねん。話できるけど、手紙とかよう書けへんねん」（私の母を知っていますか。私はいつも母に叱られているのです。話はできますが、手紙などは書

けないのです)といった調子でしゃべる。話を通じないわけではないが、聞いている方は疲れるし、本人も標準語ができないので困る場面があると言う。

彼らの言うとおり、標準語も方言もどちらも必要だと思うので、授業や教材の中で方言も紹介している。例えば、「行きません - 行かない - 行けへん」「使ってもいいです - ~てもいい - ~ても構いません - ~てもかめへん」「使ってはダメです - ~てはダメです - ~たらアカン」のようにセットでとりあげ、「関西弁を話す必要はないが、聞いてわかることは必要だと思う」と説明している。

教材に方言や地名を入れると、使用地域が限定されてしまう。一般の教材に方言などが入らないのはこの点があるからだと思うが、我々は地域の日本語ボランティアとして、あえて地域にこだわっていきたくて考えている。

### 生活用語集

日本語教材以外にも、中国語と日本語対訳の生活用語集を作成し配布している。一冊は『学校生活用語集』(A5判113頁)である。学校用語には、朝礼台、部活、三者面談など辞書に載っていない単語が多く、また会話も一種独特である。子どもたちは、先生から教えてもらう日本語と学校で実際に使われる言葉のギャップにとまどっている。本書は、「学校での言葉がわからない」という子どもたちのために作成したものである。また、親からは、「中国の学校とはかなり違う」という話を聞いたので、学校生活についての案内も載せている。

この種のもは、これまで各地で教育関係者が作っているが、多くは学校側が知らせたいことを中心に編集されている。私たちは、生徒や親が知りたいことを軸にして作ろうと試みたのである。

1994年4月に初版を発行したが、5年たった今では学校の状況も変わり、中国から来た子どもの方の事情も変わっている。実情にあったものを新しく作る必要性を感じている。

もう一冊は『医療関係用語集』(A5判400頁)である。これは、「歯医者に行きたいがどう言えばいいかわからない」「妻が入院することになったが、日本語ができないので困っている」「検査でどんなことをするのか不安だ」という相談を受けて、そのつどその人個人用に中国語と日本語で作っていた単語集や会話

集を合わせて、さらに充実させたものである。

すでに医療関係者が作った用語集や会話集が市販されているが、それらは一般に高価で実際の会話が少ないうえに、医師の側が患者に尋ねたいことや伝えたいことが中心になっていて、帰国者には利用しにくい。それで、実際に患者や家族が医師に伝えたいことや尋ねたいことを日本語ではどう表現するのかという点を中心に、帰国者の不安を軽減するものを作ろうと思った。彼らの中からも、こういう考え方に賛同して、積極的に助言したり翻訳に協力してくれる人が出てきた。

彼らから出されたアイデアの一つに、「中国音順日本語索引」がある。例えば、日本語の「風邪」という文字の意味を知ろうとして索引を引く場合、読みがわからないとひけない。先に画数や部首で読み方を調べ、それからひくことになる。そこで、「風」を中国語読みの“feng”でひくことができたとしても便利だ、というのである。考えてみると、日本人が中国語の“肌力”の意味を調べたいと思っても、中国語の読みがわからなければ辞書を引くことができない。部首と画数で“肌”の読みを調べてから、再び辞書を引くことになる。しかし、日本語の「はだ」で直接引けて、「肌力(jili)：筋力」のように中国語の読みと日本語の意味がわかればたいへん便利である。これとちょうど逆だ。さっそく、この意見を取り入れて、この本にはピンイン順の「中国語索引」と五十音順の「日本語索引」の他に、三番目の索引「中国音順日本語索引」を付けることにした。

他にもいろいろな工夫があるが、これらの冊子作りは、彼らのアイデアと協力なしにはとうてい考えられない。こうしてできた冊子を持って病院に行き、「これがあって助かりました」と言ってくれる人たちの声が励みになる。

以上の2冊は日本語教材ではなく、生活支援のハンドブックである。本来、教育関係者や医療関係者の手で作られるのがよいと思うが、利用する側の視点に立つてつくることは難しい。その点我々ボランティアは、より帰国者に近いところで作ることができると思う。

## 5. 子どものためにも日本語は必要

学習者は、「日本語ができなかったら、すべてのことに困ります。日本語ができたら、暮らしやすくなります。だから日本語が勉強したいです」と言う。帰国者本人の呼び寄せで来日した二世、三世の若い世代でも、仕事がつい、勉強時間がとれない、学習経験が少ないなどの事情もあってなかなか覚えられない状況である。日常会話ができるようになるにも時間がかかる。

しかし、子育て真っ最中の若い世代にとっては、日本語は生活のために必要というだけではなく、子どもや家庭、家族関係を守るためにも必要なのである。それは次のような理由による。

来日時点では親も子どもともに、日本での新生活をゼロからスタートする。普通なら、親の方が経験や知識をより多く持っているはずだが、日本と中国の社会システムや生活様式がかなり違うために、親の中国での生活体験や知識が日本では生かされない。電気製品の使い方にとまどい、銀行の自動振替に困惑する。職場での仕事の仕方や、子どもの学校生活もかなり違う。言葉がわからないだけではなく暮らし方もわからないので、人に頼らざるを得ない。来日当初は日本語のわかるおばあさんや親戚の助けを借りるが、それにも限度がある。

家庭の中では、親よりも子どもの方が早く日本語を習得するし、日本の生活習慣に慣れるのも早いから、ある程度時間がたつと親が子どもに頼るようになる。例えば、自分が病院で診察を受ける際に子どもに学校を休ませて通訳として連れていったり、水道料金の支払いをするのに小学二年生の子どもを一人で水道局に行かせたなどの事例がある。地域との対応にも子どもが当たるし、学校からの連絡も子どもを通して行われる。

そうなると、先生が保護者に伝えようとしたことを、子どもが親に伝えないとか、自分に不都合なことはごまかしてしまうということも起こる。また、親が「宿題しなさいよ」と言っても、子どもに、「お母さんは知らんやろうけどな、宿題は中国の習慣で、日本には宿題はないねんで」と言われたら、親は確かめることができない。言葉ができないということは、情報が得られないということなのだ。そのために、親が子どもの言いなりになってしまったり、子どもが親を馬鹿にしたりする。また逆に、本来親がすべきことまでも背負わされてあえいでいる子や、親に相談しても仕方がないと日本社会との軋轢に一人で耐えている子もいる。

本稿では成人の日本語学習について述べ、子どものことにはほとんど触れていないが、子どもたちは、大人とは異なる大きな課題を背負っている。子どもたちがそれを乗り越えて日本で成長していくためには、親の力が不可欠である。もし、親が日本語ができず日本社会についての情報を持っていなければ、子どもを教えることも守ってやることもできなくなってしまうのである。

## 6. 気軽に学べる日本語教室

帰国者が自由にのびのびとかつ真剣に学べる場でありたいということから、随時受講することができるようにしている。いつからでも受講開始できるし、いったん受講しなくなっても、いつからでも再開できる。また、週に1回の地域の日本語教室という性格上、学習者が毎回休みなく出席するということは望めない。仕事の都合や体調、家庭の事情によって休むのはやむを得ないと考え、欠席の理由を問いただしたりしないようにしている。前回欠席したことや宿題ができていないことで気後れして教室に来られないということがないように、出欠は担当講師がメモする程度にさりげなくとり、宿題も強制しない。このことによって、病気がちの人、妊娠中の人、乳幼児のいる人、仕事の忙しさに波があって定期的には来られない人なども、比較的気軽に来ることができる。そのかわり、出席した時には、めいっぱい学んでもらえるようにしなくてはならないと考えている。

逆に、講師の方は休めない。事情を知った顔見知りの講師がいると思うからこそ、学習者は安心して来るのだ。それを思うと、それぞれクラスを担当している以上、「ボランティアだから行ける時だけ行けばいい」と気軽に考えるわけにはいかない。「土曜日は日本語教室の日」として、他の個人的な予定は入れないようにしている。

さらに、外部からの見学や学習者への取材、アンケート調査などは断っている。見学者があると、授業に集中できないし、「誰が何のために見るのか、どこに報告されるのか」と緊張や不安が高まるのだ。また、アンケート調査などについても、彼らは気軽に適当に答えることに慣れていないから、「どこに報告されるのか、そのことによって何か影響が及ぶのではないかと警戒する。何も影響はな

いと言えば、それなら、1週間に2時間というわずかな学習時間を削ってまで協力しなければならぬ必要性は何かということになる。彼らが不安に思うようなことはできるだけ避けたい。

休憩時間や授業終了後には、中国語が飛び交って盛んに情報交換がなされている。どの店の野菜が新鮮か、電気製品はどこで買うのが安いか、どこかの病院で出産したかなど、来日したばかりの人が前に来た人にいろいろ尋ねている風景もよく見られる。また、ずっと以前の学習者が、車の免許を取った、職業訓練校を卒業したと立ち寄ることもある。そういう人を囲んで、どうやって免許を取ったか教えてもらうこともある。赤ちゃんを抱いてくる人、帰省したからと訪ねてくれる大学生もいる。先に日本に来た先輩たちから学ぶことは多い。日本語教室が単に日本語だけでなく、他の情報も得られる場であることは大切だと思う。

その他にも、学校からのプリントがわからない、保育所への連絡を日本語でどう書けばいいかなどの相談に来る人もいる。土曜日に日本語教室に行けば、何でも気軽に尋ねられると思っている人たちに、できるだけ応えたいと思っている。

## 7. 地域でボランティアにできること

「たかだかボランティアに何ができるんだ。専門家に任せておけばいいじゃないか」とか「行政がするべきだ」と、周囲の人たちから言われることもある。また、我々自身、「ボランティアにできることは、たかがしれている」と思ってしまうこともある。しかし、ボランティアだからこそできることもある。

その一つは、今まで述べてきたように、予算や採算に関わりなく学習者一人一人の要望にきめ細かく応えることができるということだ。日本語の教え方でも教材等の作成でも、多くの人の役に立つようにと考えて一般化してしまうと、かえって誰の役にも立たないことがある。一般化できない地域の実情や一人一人の事情や思いを汲み上げて、その人に役立つものを一緒に作るのは、ボランティアだからこそできることだと思う。

もう一つは、私たちは行政の職員でも学校の先生でもないということだ。こういう機関の人々に対して、帰国者たちは、公的立場にある職員だということでは

頼感を持つ一方で、警戒心を抱いたり不信感を持っている場合がある。私たちボランティアに対しては、頼りないと思う一方で、公的機関に属していないからこそ対等に接してくれているようにも思われる。授業や相談の中で、彼らは日本人や日本社会に対する不信感や不安をも話してくれる。

おかげで、私たちは今まで見えなかったものが見え、今まで感じなかったことを感じるようになってきた。普段何気なく使っている日本語を注意してみるようになったことはもちろんだが、自分の常識がすべてでないことを知った。また、彼らが行政の窓口や病院や学校で感じる日本社会の住みにくさに、我々もまた気づかされる。

彼らの相談事には、言葉や習慣に関するものだけでなく、生活そのものに直接関わるものも多い。そのため、普段から生活指導員、市や区の担当課、ケースワーカー、医師、小中学校の先生、通訳、地域役員の人たちと連絡を取れるようにして、必要な場合は関係機関に橋渡しをする。これらの人たちは、帰国者が早く安定した生活をおくり、住民の一人として地域でトラブルなく暮らすことを望んでいる。それは、帰国者自身の望んでいることでもある。それなのに、ほんの些細なことから行き違いが起きてしまう。

『日本人と中国人の交流百話』の所でも述べたが、誤解や文化習慣の違いなどによってトラブルが起こるのを防ぐためには、帰国者に情報を与えることが大切であると同時に、地域や行政の人や学校関係者に、彼らの思いや疑問や困っている点を知ってもらうことが必要だと思う。

例えば、行政や学校が外国人用に作っている各国語訳のパンフレットの中には、日本人向けの文書を外国語に翻訳しただけのものがある。いくら翻訳されていても、日本人向けのものが下敷きになっていれば、日本人にとって常識になっていることや必要ないことは書かれない。しかし、その点こそが、文化習慣の違う彼らには理解しにくく誤解が起こりやすいところなのである。我々は、翻訳や研修などに協力を依頼される機会を利用して、関係者に配慮をお願いしている。

こういう活動の中で多くの人に出会ったが、帰国者の思いを真剣に受け止めてくれる人が決して少なくないことにたいへん勇気づけられる。地域に関わるこういう人々と帰国者をつなぐ役割を、私たちボランティアが果たすことができれば、地域はもっと暮らしやすい所になっていくだろう。今後も、日本語教室がそんな

場になれるように努めていきたいと思っている。

- \* 本稿は、『解放教育』 354 (財団法人解放教育研究所編 1997年7月号)所収の「日本語教室での質問や要望から見えてきたもの」に加筆したものである。
- \* 筆者作成の自主教材については、『同声 同気』(中国帰国者定着促進センター教務課講師会発行ニューズレター)第11号、12号、13号に紹介記事が掲載されている。